



Title	横合地区：心の中の遊園地：イベントとしての「地産地活」
Author(s)	朝, 木日力格; 米田, 沙由葵; Lin, Yina
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 199-214
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

横合地区：心の中の遊園地 ——イベントとしての「地産地活」

朝木日力格 (大阪大学大学院人間科学研究科)

米田 沙由葵* (大阪大学大学院人間科学研究科)

LIN YINA (大阪大学大学院人間科学研究科)

1. はじめに

2025年3月11日に東日本大震災から14年が経過したが、岩手県九戸郡野田村では震災直後から迅速な意思決定のもと積極的な復興が進められてきた。一方で、地球温暖化による海水温変化が漁業に及ぼす影響、中心市街地の空洞化、少子高齢化など、復興以外の課題にも直面している。筆者らは大阪大学大学院人間科学研究科にて開講された「コミュニティ・ラーニング特定演習」の授業の一環として山間部を担当し、野田村横合地区を対象に活性化をテーマにフィールドワークを実施した。人口規模が小さく高齢化が進むこの地域で、地区住民と行政が地域活性化やイベントをどのように捉えているのかに注目し調査を行った。調査の過程で、両者の認識のずれや、ある地区住民が語った「心の中の遊園地」という象徴的な表現に出会った。私たちはこの表現を手がかりに、横合地区の活性化のあり方を考察することとした。

* ; u614846j@ecs.osaka-u.ac.jp



写真1 山班のメンバー（左から：リン、チョモ、ヨネダ）
2025年8月22日 今井貴代子撮影

2. 調査概要

2.1 調査方法・期間・対象者・スケジュール

本調査は2025年8月18日（月）から20日（水）の3日間、横合地区において実施した。地区住民・店舗関係者・施設職員・役場職員へのインタビューに加え、アジア民族造形館や大葛公民館サロンの実地観察を行った。

初日は、大阪大学の授業担当教員から紹介を受けた日形井在住の内野澤進さん・内野澤てるさん（70代）にインタビューを行った。その際の紹介を通じて、^{ひかた}間明 在住の畑村ひでさん（90代）の連絡先を得ることができた。こうして地区住民からのつながりを手がかりに、調査対象を広げていった。

二日目の午前には、畑村ひでさん（90代）を訪ね、地域やイベントに関する率直な意見を聞き取った。午後には、日形井にある宿泊施設「^{ひかた}苦屋」¹を訪ね、店主の坂本久美子さん・坂本充さん、さらに来店客にインタビューを行い、地域内外の多様な視点を得ることができた。その後、地区住民から繰り返し言及されていたアジア民族造形館を訪問し、展示を観察するとともに職員の崎廣輝美さん・川土則子さんに話を伺った。さらに、崎廣さんのお母様の紹介により、



写真2 内野澤進さん・内野澤てるさんと山班のメンバー
2025年8月19日チョモのカメラでタイマー撮影



写真3 畑村さんとメンバーの対話の場面
2025年8月19日チョモ撮影

表1 フィールドワークのスケジュール

日程	時間	場所	活動内容
8月18日(月)	午前～午後	日形井・内野澤さんご自宅	内野澤進さん(70代)、内野澤てるさん(70代)にインタビュー
8月19日(火)	午前	間明・畑村ひでさんご自宅	畑村ひでさん(90代)にインタビュー
	午後	古屋	店主・坂本久美子さんと坂本充さん、来店客にインタビュー
		アジア民族造形館	館内の見学、職員崎廣輝美さんにインタビュー
8月20日(水)	午後	大葛公民館	サロン活動の見学・観察
		間明・A子さんご自宅	A子さん(70代、畑村ひでさんの隣人)にインタビュー
	午後	生涯学習センター(図書館)	文献調査
		野田村役場	教育委員会職員・産業振興課職員にインタビュー

大葛公民館で行われているサロン活動を見学することもできた。三日目には、間明在住のA子さん(70代、畑村さんの紹介)を訪問し、自宅にあったサロンの手工芸品を手がかりに活性化やイベントに関する考えを伺った。午後には役場を訪ね、教育委員会と産業振興課の職員にインタビューを行い、地区住民と行政双方の視点を対比的に把握することができた。

調査スケジュールは表1、調査対象者は表2に示した。

表2 調査対象者

区分	対象者
横合地区住民	内野澤進さん・内野澤てるさん（70代）、畑村ひでさん（90代）、A子さん（70代）
店舗関係者	居酒屋主 坂本久美子さん・坂本充さん、来店客の方々
施設関係者	アジア民族造形館職員 崎廣輝美さん・川土則子さん、大葛公民館サロン参加者の方々
行政関係者	教育委員会職員 立花雄太郎さん、産業振興課職員 貳又正貴さん・前田綾杜さん

2.2 横合地区の概要

横合地区は岩手県北部の野田村に位置し、大葛（おくごう）、種綿（たねわた）、間明（まみょう）、日形井（ひかたい）の四集落から構成される（写真4）。かつては南部有数のたたら鉄産業の地として栄えたが、今日では山間部の自然に恵まれた地域である一方で、人口減少と高齢化が深刻化している。特に若年層の流出が進んでおり、社会的・経済的な影響が地域全体に及んでいる。2025年7月末時点における各集落の人口と世帯数は、日形井27人・17世帯、間明31人・17世帯、種綿32人・17世帯、大葛27人・15世帯である²。

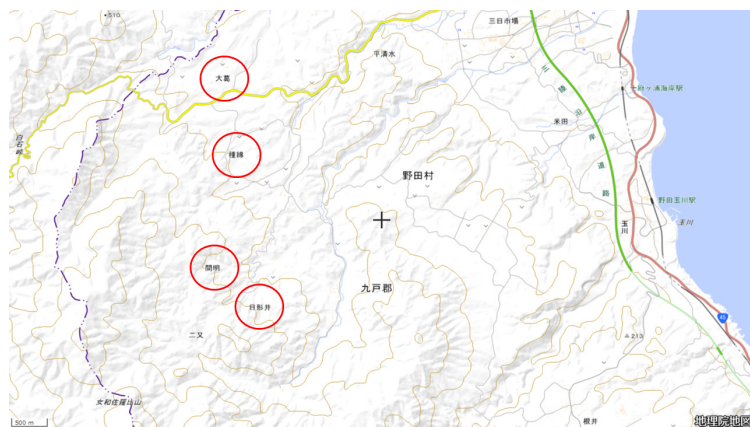


写真4 横合地区の位置

出典：国土地理院地図に筆者ら加筆

<https://maps.gsi.go.jp/#14/40.080895/141.811008/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>（2026/1/7 アクセス）

こうした人口減少に伴う高齢化を背景に、横合地区では地域の活性化が重要な課題となっている。2025年度、役場の担当課は複数回のイベント開催を計画しており、地区住民の交流を促進し地域に活気を取り戻す取り組みが検討されている。しかしながら、どのような状態を「活性化」と呼ぶのかについては地区住民と行政との間で明確な合意がなく、また地区住民が求める内容も行政側で十分に把握されていない印象である。したがって、事業を進めるにあたっては地区住民の実態や意向を丁寧に汲み取る必要がある。

本調査は、このような課題認識を踏まえ、地区住民および行政関係者への聞き取り調査と現地観察を通じて、横合地区における地域活性化の方向性を明らかにすることを目的とする。

3. 調査結果

本調査では、横合地区の住民と行政の双方に対して聞き取りを行い、地域イベントや活性化に対する考え方を整理した。その結果、両者は「日常を守り、住民が元気に暮らせること」を共通の目標としつつも、イベントの位置づけや主催の認識などに違いが見られた。

3.1 村民に対する調査結果

3.1.1 イベントに対する意識

地区住民への聞き取りから、イベントに対しては肯定的な側面よりも負担感が強く意識されていることが明らかとなった。具体的には、主催者が不明確であること、少人数の横合地区のみで担うには負担が大きいこと、また高齢化により責任を引き受けることが困難であることなどが挙げられた。さらに、一人が代表となって役場と調整することの大変さも指摘されており、組織体制の脆弱さが浮き彫りとなった。実際、日形井で行われていたサロン活動も、コロナ禍の収束後には「引っ張っていく人がいない」という理由で再開されていないことが、内野澤てるさんの話から明らかになった。

また、イベント参加のハードルに関しても複数の課題が示された。地区内の移動が困難であること、会場内での移動の不便さ、単独での参加を避ける傾向、さらには参加のきっかけ自体が乏しいことなどが挙げられ、責任面に限らず参加自体にも大きな障壁が存在している。畑村ひでさんは坐骨神経痛を抱えてお

り、かつて野田まつりが開催されても参加できなかったと語った。友人のA子さんが車で送迎することもあるが、本人にとっては「人に迷惑をかける」という感覚が強く、余程の必要がない限り依頼しないという。加えて、A子さん自身も「一緒に行く人がいなければ話し相手もおらず、あまり楽しめない」と述べており、同伴者の有無が参加意欲を左右する大きな要因となっていることがわかる。

3.1.2 活性化に対する意識

一方で、地区住民が考える「活性化」のあり方については多様な意見が寄せられた。共通して示された要素としては、地域資源を活用すること、リピーターの存在、若者や子どもが暮らしやすい環境があることなどが挙げられる。さらに詳細に聞き取ると、活性化とは「村内で人が動くこと」「横合地区にしかないものを守ること」「人と話すことで元気になること」「自然に人が集まること」といった具体的な姿で語られた。

象徴的な事例として、苫屋でのインタビューでは、野田村に隣接する久慈市出身の女性の語りが得られた。彼女は幼少期から「アジアの広場まつり」に参加していた。アジアの広場は、アジア民族造形館に隣接する芝生広場であり、この祭りの会場にもなっている。現在は千葉県に居住しているものの、日形井での思い出を大切にしており、将来はアジアの広場で結婚式を行う計画を立てていると語った。このように、彼女にとってアジアの広場は「何度でも行きたい場所」であり、「心の中の遊園地」として記憶に刻まれていることが確認された。

これらの結果から、地区住民が思い描く活性化とは、単なる経済的・制度的な活性化ではなく、「また訪れたい」「再び戻ってきたい」と思える場所を、地域資源を介して実現することであると考えられる。

3.2 行政に対する調査結果

3.2.1 イベントに対する意識

私たちは今回の調査において、地区住民の声に加え、行政の立場から横合地区の現状や課題を把握するために、行政関係者へのインタビューを行った。具体的には、教育委員会の立花雄太郎さん、産業振興課のふたまた貳又正貴さんと前田綾杜さんにご協力をいただいた。地区住民と行政の双方に耳を傾けることで、相互の認識の違いや共通する思いをより立体的に把握できるのではないかと考え

た。

まず教育委員会を訪ねた背景には、地区住民から繰り返し聞かれた「昔はアジア民族造形館に多くの人が来ていた」「以前は賑わっていたが、今は寂しくなった」といった声がある。これらの言葉には、地域資源を生かきれていないことへの残念な思いや、かつての活気を取り戻したいという期待が込められているように感じられた。そこでアジア民族造形館を所管している教育委員会からどのように現状を捉えているのかを確かめるため、教育委員会の立花さんにお話を伺った。

立花さんからは、「イベントを開催したくないわけではないが、実際には学校やアジアの広場を担当する産業振興課、庵日形井³を担当する未来づくり推進課など複数の課との連携が必要であり、その調整は難しい」との説明をいただいた。ここから、行政内部の「縦割り構造」がイベント実施の妨げになっていることが浮かび上がった。地区住民から見れば「なぜアジア民族造形館でイベントをしないのか」という疑問になるが、行政側からすれば「調整が必要で簡単には進められない」という事情があることが理解できた。

一方で産業振興課を訪ねた理由は、同課がアジアの広場を直接管理しているからである。アジアの広場は横合地区住民が集まる拠点であり、イベントを行う際の主要な会場となる。そのため、現場を担う産業推進課がどのように考えているのかを知ることは重要であった。産業振興課の貳又さんと前田さんに伺ったところ、「イベントはゴールではなく手段の一つである」「村外向けだけではなく村内向けのイベントも考えている」「NPO法人SET⁴と3年スパンで協力している」との見解が示された。

このように、役場は「イベントは地域活性化を実現するための手段」と位置づける一方で、上記3.1.1で記したように住民は、「イベントそのものに参加すること」を目的として捉えている。役場と住民の立場は一見すると乖離しているように見えるが、必ずしも対立関係にあるわけではない。むしろ、住民の期待を起点としつつ、役場の戦略的な視点を重ね合わせることで、双方の考えを補完し合う関係を築ける可能性があると考えられる。

3.2.2 活性化に対する意識

さらに、私たちは「活性化」という言葉の意味についても尋ねてみた。その結果、行政の方々は「外部の力をうまく活用してリピーターを増やすこと」「住民

が心身ともに元気であること」「イベントがなくても横合地区のことを知ってもらえる状態をつくること」を重視していると語ってくださった。つまり、行政にとっての「活性化」とは単に賑やかなイベント開催することではなく、外部との交流を通じて地域を継続的に支え、住民の生活が健やかで豊かになることを意味していた。

しかし同時に、横合地区以外の住民の意識には行政とは異なる点があることも指摘された。例えば、立花さんからは「アジア民族造形館を聞いたことはあるが、行ったことはない」「なぜ日形井でアジアなのかかわからない」といった声が村民の間に存在すると伺った。このギャップは、地域資源が十分に村民自身に浸透していないことを示しており、外部に発信する以前に、まずは地元住民にその価値を理解してもらう必要があることを物語っている。

私たち自身も、調査を進めるなかで「なぜ日形井でアジア民族造形館なのか」という素朴な疑問を抱いた。その経緯を調べてみたところ、アジア民族造形文化研究所⁵の所長であった金子重量さんが日形井に訪れた際、南部曲がり屋の風景を目にして「タイの景観と似ている」と感じたことがきっかけであったことが分かった。そこから野田村と共同で開館に至ったという歴史がある⁶。

以上の調査を整理すると、行政も地区住民も「住民に元気になってほしい」「アジア民族造形館を活用したい」という思いを共有している点では一致している。しかし、展示内容の専門性や難しさ、アジア民族造形館単独でのイベント企画が不足していたことなどが、これまでイベントの実現を阻んできた要因となってきたと言える。すなわち、最終的な目標は「日常を守ること」「住民が元気になること」で一致しているものの、その手段やアプローチの捉え方にずれがあるということである。具体的には、地区住民は「イベントそのもの」を目的と考えるのに対し、役場は「イベントは活性化のための一つ的手段」と位置づけている。また、地区住民は「イベントの主催者は誰なのか分からない」と感じているのに対し、行政は「住民は知っていると思っていた」と捉えており、双方の間でコミュニケーションが十分に行き届いていないことが浮き彫りとなった。このように地区住民と行政の間には思いの共通点と同時に、理解や立場の違いが存在している。両者の関係性を丁寧に紐解いていくことこそが、今後の地域づくりの出発点となるだろう。

4. 提案

外部からエネルギーを取り入れるのではなく、村内に存在する資源を活用し、村内で人びとが動く機会を創出することによって人の移動やつながりが生まれる。その過程で、地域に活気やにぎわいといった「エネルギー」が育まれる。これこそが、インタビューから浮かび上がった住民の考える「活性化」の姿である。以上を踏まえ、私たちは野田村にある資源を基盤に、村内で人びとの活動を促す仕組みを提案する。



写真 5 アジア民族造形館・アジアの広場・庵日形井の位置関係

出典：岩手県野田村ホームページ

https://www.vill.noda.iwate.jp/bunka_sports/kanko/kanko_spot/803.html

(2025/9/12 アクセス)

4.1 「縦割りをなくすこと」

私たちが提案する方策の一つ目は「縦割りをなくすこと」である。現在の体制では、アジア民族造形館は教育委員会が管理し、アジアの広場は産業振興課、さらに庵日形井は未来づくり推進課が担当している。これらの施設は数百メートルしか離れていないにもかかわらず、担当部門が分かれている。この体制は行政の効率性や専門性を高める利点を持つ一方で、横断的な連携が求められる

場面では大きな障壁となっている。とりわけ、地区住民が望む「アジア民族造形館やアジアの広場を活用したイベントの開催」のような複合的な取り組みは、一部門の判断や努力だけでは成立しにくく、部門間での調整に多くの時間や労力を要しているのが現状である。

したがって、私たちはこれらの施設や関連事業を一元的に管理する体制を整えることを提案したい。具体的には、既存の各課の中に横断的な「アジア民族造形館・地域活性化担当」のような総括窓口を設け、イベントや施設活用に関する住民からの意見を集約し、速やかに関係部門へと共有できる仕組みをつくることである。こうした一元化により、役場内でも担当者同士がコミュニケーションを取りやすくなり、調整にかかる時間や手間を大幅に削減できると考える。もちろん、こうした体制をつくるには新たな人員や予算が必要になる可能性もある。そのため、すぐに大規模な改革を行うことは難しいかもしれない。しかし、まずは既存の部署の中で「定期的な合同会議」を設けることから始めてもよいだろう。月に一度でも教育委員会、産業振興課、未来づくり推進課が集まり、アジア民族造形館や関連施設の活用について情報交換を行う場を設けるだけでも、現在の縦割りの弊害を少しずつ解消できると考える。その延長線上に、より一元化された組織や窓口の設立を見据えていくことが現実的な方策だと考える。

以上のように、縦割りをなくし、部門間の連携を強化することは、単に行政内部の効率化にとどまらず、地区住民の声を的確に反映させる基盤をつくり、地域資源であるアジア民族造形館の価値を再発見・再活用するための第一歩となるのではないかと考える。

4.2 「サロン体験会」

私たちが二つ目に提案したいのは「サロン体験会」である。インタビューを行った地区住民に共通して語られた話題は、サロン活動であった。サロン活動とは、社会福祉協議会の事業の一環である「ふれあいいきいきサロン」であり、村民同士の交流を目的としている⁷。

私たちが訪問させていただいた大葛のサロンでは、座布団・カバン・吊るし飾りなどが制作されていた。これらはすべて靴下のゴム部分を素材とし、社会福祉協議会から提供されたゴムを色・大きさ・伸び具合ごとに仕分け、糸くずや不要部分を取り除いてから作品づくりが行われていた。サロン活動は各集落で週1回程度行われており、現在は日形井のみで活動が休止している。また、



写真6 大葛のサロン現場
2025年8月19日チョモ撮影

集落ごとに作品の種類も異なり、大葛ではカバン、間明ではマットを作成していた。

私たちにとって、靴下のゴムがカバンやマットへと再利用される制作手法は非常に興味深いものであった。また、役場職員の間でも、輪っか編みによる具体的な作品の存在は十分に共有されていないことがわかった。

以上の現状を踏まえ、サロンを活用して活性化につなげるため、サロン体験会を行ってはどうかと考えた。その場合、体験会を野田村役場と大阪大学の共催とし、サロンの方々には講師として参加していただく。輪っかの仕分け作業については、サロン側の負担を減らすため、事前に大阪大学の学生がサロン活動に参加し、協働で行う。体験会は夏休みなどの長期休暇を活用し、地元小学生が自由研究として作品を提出できる機会とする。また、道の駅や苫屋、野田村にある宿泊施設であるえぼし荘などにチラシを掲示し、観光客が飛び入りで参加できる可能性も確保する。ただし、サロンの方々への過剰な負担を避けるため、参加人数には上限を設ける必要がある。

4.3 「野田村大展覧会」

現在、サロンの作品発表の機会は年に一度、野田村体育館で開催される野田村総合文化祭に限られている。私たちは、作品発表機会が一度きりで終わって

野田村大展览会

地域の芸術と文化を楽しむ集い

展览会情報

場所
アジア民族造形館

展示作品

- ・地元小中学生の作品
- ・サロンの作品
- ・方言クイズ
- ・どこでカモシカなど

開催回数
年2回



のんちゃん相乗りサービス

気軽にイベントに参加できるように、
お友達と一緒にならもっと楽しめるをコ
ンセプトにしたサービスです。
運営期間：野田祭りやホタテ祭りのイ
ベントの際

(このチラシはイメージです)



写真7 「野田村大展览会」チラシ

2025年8月21日筆者ら作成



写真8 「どこでカモシカ」(イメージ図)

出典：野田村観光協会「野田村観光マップ」、横合地区周辺に筆者ら加筆

しまうのは惜しいと考えているため、三つ目の提案として「野田村大展覧会」の開催を提案したい(写真7)。

開催場所としては、地区住民から「寂しい」との声が多く寄せられたアジア民族造形館を提案する。同館を管理する教育委員会からも展示品の少なさが課題として挙げられており、展覧会では展示対象をアジア造形物や民具に限定せず、地元小中学生の作品も展示することで、地区住民から聞かれた「孫の作品があれば見に行く」という声に応える。

さらに、会場内には方言クイズを設置し、地区住民や役場が共に語っていた「日常を守りたい」という思いを来館者と共有する機会としたい。加えて、アジア民族造形館の活性化には、展覧会を契機として村民や観光客が継続的に訪れる仕組みづくりが求められる。そこで一案として、参加型展示「どこでカモシカ」を提案する(写真8)。これは、来館者が横合地区の地図上に特別天然記念物である野生のニホンカモシカの目撃地点をシールで記録するもので、外部からの来訪者にニホンカモシカの観察スポットの情報を提供するとともに、村民にとっては作物を育てるにあたって、獣害であるニホンカモシカの生息範囲の変化を可視化する機能を持つ。

現段階では横合地区全体を網羅する詳細地図が存在しないため、展覧会開催に先立ち、村民と協力して地図を作成する必要がある。完成した地図は会場入口に設置し、来場者が自由に参加できる展示作品として位置づけることで、展覧会の継続的な魅力向上を図る。

4.4 「のんちゃんきたよーカー」

地区住民からは、イベント実施に伴う責任の問題に加え、参加時の移動の困難さも課題として指摘された。たとえサロン体験会や野田村大展覧会を実施できたとしても、移動手段が確保されなければ参加は難しい。そこで、四つ目の提案として送迎サービス「のんちゃんきたよーカー」の導入を提案する。本サービスはイベント開催時に限定し、近隣住民が相乗りで会場へ移動できる仕組みである。具体的には、野田村内にある三つのデイケア施設との連携を図り、社会福祉協議会や保健センターの協力を得て、デイケアの送迎時間と重ならない時間帯に車椅子対応の車両を借用することで、希望者全員の送迎を可能にする。さらに、イベント会場内のトイレや車椅子設備を整備し、バリアフリー化を進めることで、会場内での移動に対する不安を軽減する。

「のんちゃんきたよーカー」はすべてのイベントで運行するのではなく、会場内の移動環境が十分に確保されたイベントに限定して実施する。これにより、参加希望者は事前に移動手段の可否を問い合わせる必要がなく、安心して参加できるようになる。まずは野田まつり、サロン体験会、野田村大展覧会において試験的に導入し、運用可能性を検証することを提案する。

5. おわりに

私たちは村内の人が活発に移動できる仕組みをつくり、元々あるものを活かしてエネルギーを生み出す「地産地活」を目指している。ここでいう「地産地活」とは、単に地域内で資源を生産・消費するという意味にとどまらない。外から新しいものを持ち込むのではなく、すでに地域に根付いている自然・文化・人びとの営みを再評価し、それらに新たな価値や魅力を見出すことで、住民が誇りを持ち、外から訪れる人びとも惹きつけられるような循環を作り出すことを意味している。言い換えれば、「内にあるものを再び光らせる」ことこそが、横合地区の持続的な活性化の鍵となるのである。そのうえで、私たちは横合地区を「また行きたい」「帰ってきたい」「参加したい」と思える『心の中の遊園地』へと発展させたいと考える。ここでいう「遊園地」とは、必ずしも遊具や派手な施設を意味するのではない。むしろ、地元の子どもの成長して大人になったときに再び戻りたくなる場所、そして訪れた人の心に残り、再び足を運びたいと思わせるような体験や交流の場を指している。

横合地区は、豊かな自然や長い歴史、そしてアジア民族造形館というユニークな資源を有している。これらを「外から与えられた施設」としてではなく、「地域自らが意味づけ直し、誇りを持って活用する資源」として位置づけることこそが、真の活性化につながるだろう。施設や自然は単に維持・保全すべき物理的資源ではなく、人と人をつなぎ、心に残る体験を生み出すための「媒体」として活かされてこそ、価値が持続するのである。

今後は、地区住民と行政、そして外部の人びとがそれぞれの強みを持ち寄り、共に歩みを進めていくことが重要である。地区住民は生活に根ざした知恵や文化を提供し、行政は制度的な支援や長期的な視点を示し、外部の人びとは新しい視点やネットワークをもたらし、三者が協働することで、横合地区はただイベントを行う場ではなく、人びとの心に寄り添う『心の中の遊園地』として、多

くの人に愛され続ける場所へと発展していこう。

謝辞

本フィールドワークの実施にあたり、お忙しい中インタビューにご協力くださった横合地区の皆さま、産業振興課の皆さま、教育委員会の皆さまに心より御礼申し上げます。さらに、調査活動を円滑に進めるにあたりご支援くださった貫牛利一様をはじめ、野田村民および野田村役場の皆さまにも深く感謝いたします。最後に、1週間を超える野田村での滞在を支え、本フィールドワークの機会を与えてくださった渥美先生、石塚先生、今井先生、徳永先生をはじめ、関係するすべての方々に厚く御礼申し上げます。

注

- 1 「苮屋」『野田村観光協会』, <https://www.noda-kanko.com/kankou/stay/tomaya.html>, (2025年9月5日最終閲覧)
- 2 野田村役場住民生活課『03_市町村・男女別人口及び世帯数_T9～R2』未公開資料
- 3 岩手県九戸郡野田村の日形井地区にある「アジア民族造形館」は現存する3棟の美しい茅葺き南部曲り家などで構成されている文化施設である。その3棟のうちの1棟にあたる古民家が「庵日形井（いおりひかたい）」である。https://blog.noda-kanko.com/2013/0905_171600.html (2026/7/3アクセス)
- 4 NPO法人SET の団体概要によると、NPO法人SET は岩手県陸前高田市を拠点に、学生や町の方とともに「まちづくり」と「ひとづくり」に取り組んでいる団体である。<https://www.nposet.org> (2025/10/ 1 アクセス)
- 5 アジア民族造形文化研究所は、岩手県に所在する「アジア民族造形館」と関連して活動していたとされ、アジア諸民族の生活文化や造形資料の収集・研究を行っていた（「アジア民族造形館開館」『広報のだ』No.173,pp.2-3, 野田村総務課編集（1990）『広報のだ縮刷版』岩手県野田村発行, p.661.）。なお、「アジア民族造形文化研究所」の正確な設立年は明らかではないが、少なくとも1988年の出版物（『アジアの仏教名蹟』アジア民族造形文化研究所編1988）にその名称を確認できる。
- 6 野田村総務課編集（1990）「アジア民族造形館開館」『広報のだ』No.173, pp.2-3, 『広報のだ縮刷版』岩手県野田村発行, p.661.
- 7 社会福祉法人野田村社会福祉協議会、ふれあいいきいきサロン<https://www.nodashakyo.jp/cont1/18.html> (2025/9/9 アクセス)

参考文献

野田村総務課編

1990 「アジア民族造形館開館」『広報のだ』No.173、pp.2-3、『広報のだ縮刷版』岩手県野田村発行、p.661。

野田村

「アジア民族造形館のご案内」

https://www.vill.noda.iwate.jp/bunka_sports/kanko/kanko_spot/803.html (2025/9/12 アクセス)

野田村観光協会

「苔屋」

<https://www.noda-kanko.com/kankou/stay/tomaya.html>, (2025/9/5 アクセス)

野田村役場住民生活課

『03_市町村・男女別人口及び世帯数_T9-R2』未公開資料，2025年8月21日入手。

国土地理院

「地図」

<https://maps.gsi.go.jp/#14/40.080895/141.811008/&base=std&cls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1> (2026/1/7 アクセス)

社会福祉法人野田村社会福祉協議会

「ふれあいいきいきサロン」

<https://www.nodashakyo.jp/cont1/18.html>, (2025/9/9 アクセス)

NPO 法人 SET

<https://www.nposet.org> (2025/10/ 1 アクセス)